

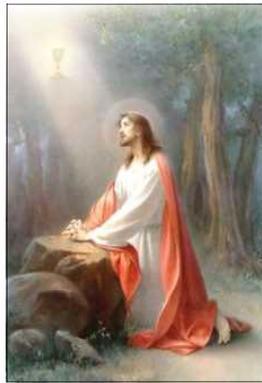
「一つになるために」

ヨハネ 17 : 20 - 26

挽地茂男

2020.5.17 日本基督教団千歳丘教会

わたしたちは、ヨハネによる福音書の17章に記された、主イエス逮捕〔受難〕直前の祈り「大祭司の祈り」を読んで参りました。主イエスが、この



世からの別れに際して最も重要なことを祈られた祈りです。ある研究者がこの「大祭司の祈り」について、このようなことを言っています。「これは『大祭司の祈り』と呼ばれているが、ここにはヨハネ福音書の主題、モチーフ、表現、用語、また現在終末論など、その全体が凝縮されており、冒頭のロゴス賛歌〔「初めに言葉があった…以下」〕との対応が顕著に見られる。」つまりこの部分にはヨハネ福音書のエッセンスが凝縮されていて、そしてこの箇所がヨハネ理解にとってきわめて重要な部分だと指摘しているのです。

さてこの17章つまり「大祭司

の祈り」は、三つの祈りで構成されていることは、すでに確認しました。一つめは①1-5節で、主イエスが自分自身のために祈る祈りでした。二つ目は②弟子たちのための祈りで、自分が世を去った後、弟子たちが守られるという、祈りでした。6-19節です。そして三つ目が今日の部分の20-26節で、③弟子たちが福音を伝えたことによって、新たに信者となる人々のための祈りです。

こう始まります。20節。「17:20 彼ら〔弟子たち〕のためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。」この祈りは「弟子たちの宣教によって信者となる人々のための祈り」です。ですから、この主イエスの祈りは、私たちのための祈りでもあります。キリストを信じて弟子となり、弟子たちの言葉によって信じる人たちの連鎖が、2000年以上も続いたので、今日の私たち、極東の私たちの所にまで、主イエスの福音が届いたのです。この祈りには、私たちもその視野の中に入っていた、といっても神の子イエスにとっては言い過ぎではないでしょう。

そして21節以下で、祈りが具体的な言葉にされます。二つの祈りが、捧げられます。第一の祈りです。21 - 23節。「弟子たちの宣教によって信者となる人々」を含めて、「すべての人を一つにしてください」と祈ります。「17:21 父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。17:22 あなたがくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。17:23 わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります。」すべての人を一つにしてください、つまり、すべてのキリスト者を一つにしてください、という祈りです。主イエス・キリス

トは天と地の間の裂け目におかれて、天に目を向けて祈ります。祈りとは、その裂け目を繋ぐものだからです。また主イエスの祈りは人と人の間の裂け目(隔て・分裂)の直中で捧げられます。祈りは、それを繋ぐものだからです。

「すべての人を一つにしてください」という祈りは、初代教会の祈りでもあり、実践目標でもありました(使徒1:15, 2:1, 44, 46, 47, 4:24, 32, 5:12)。ペンテコステの出来事は、まさにそれを象徴する出来事でした。それは、言葉・民族・文化の違いを超えて人々が一つになることが可能だということ、象徴的に示しているのです。使徒言行録2章1 - 11節。

「2:1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2:2 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。2:3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。2:4 すると、一同は



聖霊に満たされ、“霊”が語らせる
ままに、ほかの国々の言葉で話し
だした。2:5 さて、エルサレムに



は天下のあらゆる
国から帰って
来た、信心深い
ユダヤ人が住ん
でいたが、2:6

この物音に大勢の人が集まって来
た。そして、だれもかれも、自分
の故郷の言葉が話されているのを
聞いて、あっけにとられてしまっ
た。2:7 人々は驚き怪しんで言っ
た。「話をしているこの人たちは、
皆ガリラヤの人ではないか。2:8
どうしてわたしたちは、めいめい
が生まれた故郷の言葉を聞くのだ
ろうか。2:9 わたしたちの中には、
パルティア、メディア、エラムか
らの者がおり、また、メソポタミ
ア、ユダヤ、カパドキア、ポント
ス、アジア、2:10 フリギア、パ
ンフィリア、エジプト、キレネに
接するリビア地方などに住む者も
いる。また、ローマから来て滞在
中の者、2:11 ユダヤ人もいれば、
ユダヤ教への改宗者もおり、クレ
タ、アラビアから来た者もいるの
に、彼らがわたしたちの言葉で神
の偉大な業を語っているのを聞こ

うとは。」

つまりここでは、創世記 11 章
の「バベルの塔」の事件とは逆の
ことが起こっているのです。バベ
ルの塔の事件は、人間が一つの言
語であったため、その言語によっ
て人間は容易に自分たちの総意を
まとめ、その総意に悪意がはらみ、
神をも恐れぬ「人間の偉大な業」
を誇示する文化的傲慢に向かって
行きます。創世記にはこう書かれ
ていました。「11:4 彼らは、「さ
あ、天まで届く塔のある町を建て、
有名になろう。そして、全地に散
らされることのないようにしよ
う」と言った。」神はこれを見て、
人間の言葉を混乱させ、一つの言
語を多くの言葉へと多言語化し



て、その言葉の混乱によって、人
間の意思疎通を疎外し、人間の文
化的傲慢を砕かれます。聖霊降臨
の出来事とは、多言語ながら、聖

霊の降臨によって、一つ思いを回復する（神の霊[=神の思いと力]を注いで言語の壁を超える）物語なのです。バベルの塔の言葉の混乱の「癒し」の物語でもあるのです。聖霊降臨は人々の真のコミュニケーションの新たな可能性を示しているのです。

使徒言行録は、「一つであること」を教会の理想型として語りまします。使徒言行録 2 章 44 - 47 節。

「2:44 信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、2:45 財産や持ち物を売り、おのこの必要に応じて、皆がそれを分け合った。2:46 そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、2:47 神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。」

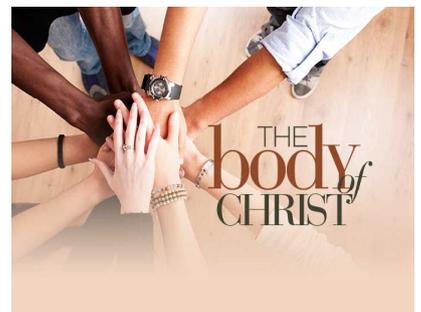
パウロは教会の理想を、「一つの体」という比喻によって語りまします。コリントの信徒への手紙 1 2 章 12 - 14 節。「12:12 体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くて

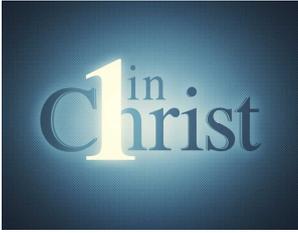
も、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。12:13 つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。12:14 体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。」

エフェソの信徒への手紙でも、「一つであること」が

強調されます。4 章 1 - 6 節。

「4:1 そこで、主に結ばれて囚人となっているわたし〔パウロ〕はあなたがたに勧めます。神から招かれたのですから、その招きにふさわしく歩み、4:2 一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し、4:3 平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい。4:4 体は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです。4:5 主は一人、

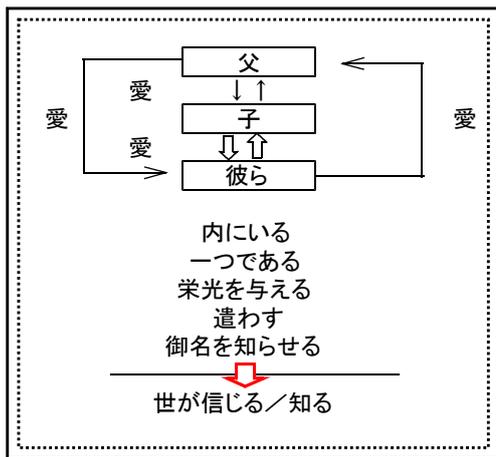




信仰は一つ、洗礼は一つ、4:6
すべてのものの父である神は唯一

であって、すべてのものの上
にあり、すべてのものを通して働き、
すべてのものの内におられます。」

ヨハネ福音書は、「一つである
こと」を、「父と子」の(相互)関
係から展開して、「神と人」との(相
互)関係に拡大し、最終的に「父
と子と人の(相互)関係」として語
ります。父なる神とイエス・キリ
ストと人間がまるで「三位一体」
の関係にあるかのように語られま
す。21節。「17:21 父よ、あな
たがわたしの内におられ、わたし
があなたの内にいるように、すべ



ての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内

にいるようにしてください。そう
すれば、世は、あなたがわたしを
お遣わしになったことを、信じる
ようになります。」宣教は当然言

葉によって為されますが、その言
葉はその背後に豊かな交わりを持
っているのです。宣教と宣伝活動
とは違います。宣教は交わりから
湧き出てくるのです。宣教とは、
神との交わり、人との交わりの証
しなのです。

今日の箇所を、まるで禅問答の
ように語られる言葉を、「関係」
に注目して整理してみましょう。
一つ目の関係、①父なる神が御子
イエス・キリストに内におられる
ます。そしてその逆に、二つ目の
関係、②御子イエス・キリストが
父なる神の内におられます。〔こ
こから話をすこし理解しやすくす
るために、父なる神を父／神、御子
イエス・キリストを子／キリス
ト、そしてわたしたち／わたしを
そのまま、でお話しします。〕「父
よ、あなたがわたし(子)の内にお
られ、わたしがあなたの内にいる」
という表現は、父と子がお互い相
手の内にいると言っているのだ
す。〈相互内在〉というすこし難
しい言葉を使うことをお許しくだ
さい。「わたしたち〔父と子〕が
一つである」(22節)というこ
とは、父と子が相互内在的に関わ
っているということです。これがす

すべての「一つである」ことの基盤です。

そして三つ目の関係③「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください」つまり、父と子が「一つである」ようなあり方で、人と人との「一つである」こと、人間同士が相互内在的に関わるという関係が語られます。「そんなベタベタ関係は、いやだわ」とおっしゃるかもしれません。しかしこれがベタベタした関係かどうかは分かりません。おそらく人間関係の本質的な事柄を指摘しているのです。お互いの内にいるということつまり〈相互内在〉とは、どういうことでしょうか。それは、まず、自分(わたし)の内に相手のいる場所があり、相手の内に自分(わたし)のいる場所があるということです。自分を失ったり、自己を滅却したり、相手のいいなりの自分になる、相手に同化してしまうということではないのです。父はやはり父であり、子はやはり子なのです。だから一つであることに豊かさが生まれてくるのです。父と子の相互内在性が、人と人との「一つであ

る」の基盤であり理想型なのです。父なる神と子なるキリストが「一つである」こと(相互内在性)が、人間と人間の相互内在、人と人との「一つである」ことへと発展しています。

そして四つ目の関係④「彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。」今度は、人が、父と子の内にいるようにしてください、と主イエスは祈っておられるのです。わたしたちが父と子、神の内に場所をもつように、と主イエスは祈っておられるのです。神の内にわたしたちの場所はすでにあるのです。このことをよく知らなければなりません。神の内に自分の場所があると確信できないのは、わたしたちが自分自身を、過去の失敗の記憶のこびりついたマイナスの尺度で自分を測り、勝ち組や負け組といった、この世の尺度と何ら変わらない、功績・業績



といった尺度で自分を測り、人の評価・評判が決定的な自己評価の材料になっているからです。イエス・キリストの十字架、それは神の内に人（わたしたち）のいる場所を作る行為、あるいは神の内に人のいる場所があることを示す行為なのです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハ 3:16）。この言葉が、わたしたちを測る唯一の正確な尺度なのです。「神が愛する存在。」自分の心がなんとおもうとそうなのです。



そして五つ目の関係⑤世が関係のあり方を変えてくると言うのです。「そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。」このように神とキリストと人が「一つであること」によって、世が神とキリストに対する信頼関係の内に入ってくる、キリストを信じるようになるというのです。宣教とは何か外に向かってキャンペーン

を張るということではなくて、教会が教会であることを出発点としているのです。その交わりのもつ豊かな力の現れなのです。教会が一つであることは、それだけで、すでに、宣教の働きをしているということなのです。阪根神学生が行った名言を一つ。「大人が楽しそうにしていることが、子どもにとって一番の証だと思います。」

さて21節で繰り返された、「内にいる」ということは、自分の中に相手の場所があり、相手の中に自分の場所がある、というだけなのではないでしょうか。「内にいる」ということに、もっと大切な意味があるのでしょうか。可能なところまで聖書にたずねてみましょう。

23節ではこう言われています。ここでも相互内在的な関係表現が使われます。23節a。「わたし(子/キリスト)が彼ら(人)の内におり、あなた(父/神)がわたしの内におられる。」まるでロシア人形のマトリョーシカのようなのです。人の内にキリストがおりキリストの内に神がいる。しかもそれはキリストを信じる人々が「完全に一つになるため」だと言われています。「内にいる」ということ

に、もう少し説明がほしいと思います。パウロの言葉が参考になります。ガラテヤの信徒への手紙2章20節。「**生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。**」もはやわたしのちっぽけな命が生きているのではない、とパウロは言うのです。キリストの命がわたしの内に生きているというのです。わたしたちに内在するキリスト、キリストに内在する神。これは理屈や論証の事柄ではなく、信仰と経験の事柄なのです。パウロはキリストの命によって生かされ、キリストの命を生きた人なのです。

フランソワ・モーリアックというノーベル賞作家がいます。彼は青年期に信仰の危機の時代を迎えます。当時の近代聖書学の歴史的研究が、聖書の記述の信頼性に疑義を投げかけて、イエスの実在をも疑うような主張を繰り返していたとき、彼はその歴史的研究の荒波に翻弄され、信仰の危機に直面



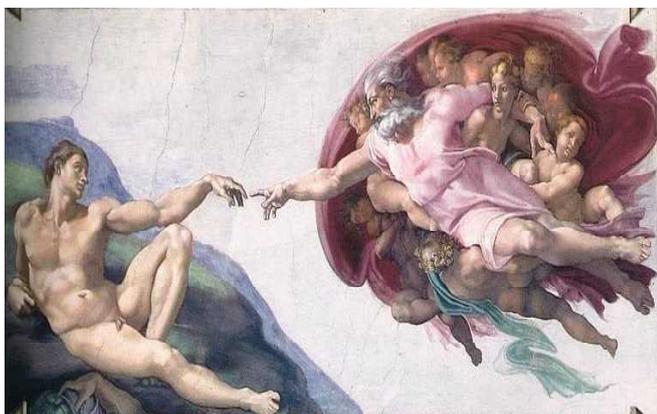
したのでした。しかしそのとき、彼がたどり着いたのは、自分（わたしたち）の内に生きているキリストでした。「この時代の動揺を経験した多くのカトリック教徒と同じく、歴史的研究の難点が、私をして、歴史以外のところに、自分が変わらずに信じ続けているこの信仰の基盤を求めさせたのだった。教会の中に生きているキリストが、聖者たちの中に、また私たち一人ひとりの中に、生きているキリストが、史的キリストをあかしする」（『イエスの生涯』）。

モーリアックは主観論に逃げたのではないのです。自分の信仰の事実に、しっかりと立つことを決断したのです。わたしたちの内に場所をもつキリスト。わたしたちの内に生きるキリスト、そのキリストに内に生きる神、また人はキリストの内に生き、キリストは神の内に生き、人とキリストと神とは、分かちがたく一つとなるのです。そして神とキリストと分かちがたく一つとなった人と人が、相互内在的に一つとなるのです。

それは人がキリストの内に生き、またキリストが人の内に生きておられるからです。「こうして」23節b。この一体性によって、「あなた(父/神)がわたし(子/キリスト)をお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼ら(キリスト者)をも愛しておられたことを、世が知るようになります」と宣教論的に展開されるのです。そして大切なことは、ここで「一つである」こと、「内にいる」ことが、「愛」という言葉に置き換えられていることです。

さて主イエスのもう一つの、第二の祈りは、「彼らをわたしのいる所に共におらせてください」(v. 24-26) という祈りです。24節。

「17:24 父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを愛



して、与えてくださったわたしの栄光を、彼らに見せるためです。」

「わたし(=主イエス)のいる所に共にいる」ということは、ヨハネの教会のみならずすべての教会に属するものたちの究極の目標です。これは終末の救いの完成・実現を指しています。

14章3節でこう語られます。

「14:3 行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」

この言葉によれば、「まだ」現実となっていない「これから起こる」事柄が存在するということとなります。しかしわたしたちは、「すでに」キリストの「内にいる」といわれ、神の「内にいる」と言われ、神もキリストもわたしたちの「内にいる」と言われたのでした。なのに、わざわざ主イエスが「彼らをわたしのいる所に共におらせてください」と祈るのは、この祈りに「すでに」現実となっている部分と「まだ」現実となっていない部分が同時に存在しているからです。聖書の言葉には、いつも、「すでに」と「いまだ」が存在し

ています。①現在のことであり、同時に、未来のことであり、②聖霊によって現実となっていると同時に、究極の目標として追い求めていかなければならないものがあります。それはヨハネの手紙一 3章 2節に語られていることと同じです。「ヨハ3:2 愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。」

「すでに」と「いまだ」はヨハネ福音書が（そして聖書が）語る信仰の特徴です。わたしたちは「すでに」信仰によって主と共にあり、また主と一つです。しかし「いまだ」主にお会いするために、わたしたちはそれぞれの人生の馳せ場



を走り続ける必要があるのです。わたしたちは神様によって創られた被造物であり、天地創造の時に創られた「時間」の制約の中に生きるものだからです。天と地の間の裂け目の中に置かれているのです。永遠と時の間の裂け目に置かれているのです。「すでに」と「いまだ」の間の置かれているのです。そして祈りとは、その裂け目を繋ぐものなのです。わたしたちは「すでに」信仰によって「主イエスのいる所に共にいる」と言うことも出来ると同時に、「いまだ」「イエス様のいる所に共にいる」ことを願うと言わざるを得ないのです。

「主イエスのいる所に共にいる」時、それは終末の時、裁きの時です。しかしそこにも「すでに」と「いまだ」があります。「いまだ」世の終わり・終末の時、裁きの時は来ていません。しかし、主イエスは「すでに」とも言われるのです。3章 18節。「3:18 御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。」裁きの時は、「いまだ」未来のことであると同時に、「すでに」現在のことでもあるのです。今がす

でに裁きの時でもあるのです。

ヨハネ福音書の時間は、基本的に、横に流れていきません。縦に積み重なっていくのです。これから起こる、受難のことも、十字架と復活も、主イエスが天に帰る昇天のことも、そして終末のことも、縦に現在に積み重なってくるのです。同時に主イエスが生きた過去



の公生涯の様々な出来事も、旧約の預言者の預言の時代と言葉も、そして天地

創造の時も、その創造以前の時も縦に積み重なっていくのです。それが祈りの時間であり、祈りの空間なのです。天と地と、そして過去と未来と現在が一つにされていく時なのです。

魂は「時」から「永遠」に向かっていきます。「地上」から「天」へ、「この世」から「神の国」へと上っていくのです。「主イエスのいる所に共にいる」時、創造以前からの主イエス(御子)の栄光を見るのです。わたしたちは「いまだ」世の終わり・終末を待ち望ん

でいると同時に、「すでに」創造以前の永遠の栄光を見ているのです。見る者が「**創造者のもとにいる**」からです。そして①創造者に繋がることによって栄光は現され、②創造者に繋がることによって、生命はその根源と繋がるのです。③創造者に繋がることによって、(神との関係の中で)人格的生命が回復するのです。

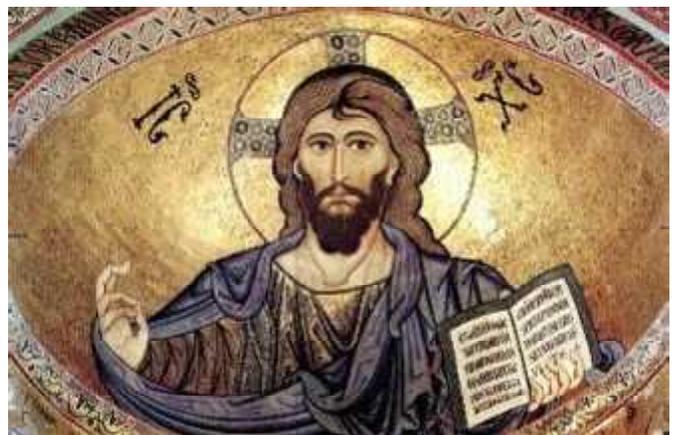
聖霊を受けるとは、神が土の塵から人間を創造されたときに、神が土の塊に吹き込んだ神の生命の〈 Pneuma 〉(霊/息)を受け取ることです。復活した主イエスは、ユダヤ人たちを恐れる弟子たちが集まっている部屋にやってきて、再会した後、弟子たちに息を吹きかけて、「(聖)霊をうけよ」と言われました。「祈る」とは、その創造者の息に呼吸を合わせることです。その時、「すでに」この地上で創造者の与える栄光を見るのです。そして同時に「いまだ」見ざる栄光に向かって邁進する力を得るのです。

最後にローマ書の8章を読んで終わりたいと思います。少々長いので途中割愛をしながら読まず。

8:14 神の霊によって導かれる者

は皆、神の子なのです。8:15 あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。…8:18 現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないと思いません。…8:22 被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。8:23 被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。8:24 わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。8:25 わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。8:26 同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもつ

て執り成してくださるからです。…8:28 神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。…8:31 では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。8:32 わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。8:33 だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。8:34 だれがわたしたちを罪に定めることができましょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、



わたしたちのために執り成してください。8:35 だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができます。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。8:36 「わたしたちは、あなたのために／一日中死にさらされ、／屠られる羊のように見られている」と書いてあるとおりです。8:37 しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって**圧倒的な勝利者となるのです(新改訳)**〔新共同訳「輝かしい勝利を収めています」〕。8:38 わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のもものも、未来のもものも、力あるものも、8:39 高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

新しい1週間の歩みのために祈りましょう。

2020.5.17 日本基督教団千歳丘教会

